

# 滋賀県立琵琶湖博物館協議会 令和8年度第1回会議

日 時 令和8年（2026年）7月24日（金）

13時30分～15時30分

場 所 琵琶湖博物館1階セミナー室

## 会 議 次 第

1 開 会

2 議 題

（1）第三次中長期基本計画 令和7年度評価について

（2）その他

4 閉 会

## ○開会

司会（廣部副館長）：失礼いたします。それでは定刻になりましたので、ただいまから滋賀県立琵琶湖博物館協議会令和8年度第1回会議を開催いたします。開会にあたりまして、館長の亀田がご挨拶申し上げます。

亀田館長：皆様こんにちは。本日は皆様お忙しい中、また大変お暑い中、当館の協議会にご出席いただきまして、本当にどうもありがとうございます。7月後半に入りまして、子どもたちも夏休みに入ったということで、おかげさまで博物館も大変賑わっている状態になっております。先週の連休も7,000人以上のお客様にお越しいただきまして、こちらとしては喜ばしいことなんですけれども、ただ、非常に混雑しましたりですとか、入口の列が絶え間なく伸びていたりということで、こちらとしましては、いかに快適に過ごしやすい展示を見ていただくかというところにちょっと苦慮しているところもございます。ちょっとそういったこともありまして、今日、展示室の温度を下げている状態ということで、こちらのお部屋が少々暑くなっておりますけれども、ご了承いただければと思います。

今年は博物館もおかげさまで、開館30周年ということで、後で詳しくはご紹介させていただきますけれども、色々な行事を開催しているところでございます。4月には、工事をしておりましたビワコオオナマズ水槽やコアユ水槽もオープンいたしましたし、7月18日からは企画展示も30周年記念という形でオープンさせていただいているところになります。またこれから年度後半に向けて、皆様への感謝の気持ちも込めていろいろな企画も予定しておりますので、また皆様もご参加いただければと思っております。

今回は、今年度第1回目の協議会ということで、昨年度の年度ごとの内部評価を皆様にご評価いただくということになっております。昨年度につきましては、計画の中間見直しの方にも皆さんにご意見いただきまして、新たな見直しの計画を作り直させていただいたところになります。こちらについては、皆様にご大変お世話になりました、どうもありがとうございました。昨年度の評価につきましては計画の5年目、前半の最終年度ということで、年度ごとの内部評価と合わせて、今後5年間の見直し、あるいはさらなる長期的なあり方も含めて、内部の評価等をさせていただいているところです。総評に私からも書かせていただきましたけれども、ICTの活用ですとか、そういったことはいろいろな事業の中で発展させてきています。また、研究の成果や資料の収集・整理の成

果として企画展示やギャラリー展示も開催させていただくことができました。博物館としては複数の活動を組み合わせて行えたということで、良かったと評価をしているところです。また、いろいろな地域の方々や企業の方々などとの連携も進みまして、多くの方、多様な方々の出会い、学び合いの場といった博物館の役割も、少しずつ発展してきたところかなと考えているところです。ただ一方で、施設の老朽化ですとか、収蔵環境の整備、あるいは備品等の調達などについては、まだまだでございますので、そのあたりにつきましては、また今後、なんとか改善していくように進めていきたいと考えているところです。今日はこうした内部評価について、ご説明させていただきますので、皆様から忌憚のないご意見、ご評価をいただければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

廣部副館長：私は、本日司会させていただいております、副館長の廣部と申します。どうぞよろしくお願いいたします。議事に入ります前に、定足数のご報告をいたします。本日の会議では、上久保委員、森委員が欠席です。なお、澤田委員につきましては、4月にご転勤されまして、後任として渡辺委員にご出席いただいております。渡辺委員どうぞよろしくお願いいたします。なお、協議会の定足数につきましては、条例第9条第2項の規定により、委員13人のうち11人ご出席いただいておりますので、定足数を満たしており、会議が成立しておりますことをご報告いたします。以後の議事は、条例第9条第3項の規定により、会長が会議の議長となることとなっておりますので、村上会長、どうぞよろしくお願いいたします。

村上会長：それでは、本日進行させていただきます。皆様のご協力をよろしくお願いいたします。まず、次第に基づきまして、議題のうち、第三次中長期基本計画令和7年度評価について、事務局からお願いいたします。なお、事業目標の項目が6つありますので、説明及び、2項目ずつ区切って行ってまいります。はじめに全体の説明と事業目標の1、2について説明をよろしくお願いいたします。

河崎企画・広報営業課長：企画広報営業課長の河崎でございます。どうぞよろしくお願いいたします。全体のご説明をさせていただきたいと存じます。まず資料の2、第三次中長期基本計画令和7年度内部評価図という図がございますので、こちらの方で簡単に私の方から全体の説明をさせていただいた後、それぞれ事業目標を2つずつ、先ほど会長からご説明いただいた通り2つずつですね、ご説明させていただいてという形になるか

と存じます。資料2の方ですけれども、事業目標1から6まで、それぞれの目標に対して、昨年度、令和7年度どのような状況だったかという形で、簡単に画で表現しております。事業目標1の方ですけれども、「琵琶湖の魅力を深く掘り下げ、世界に紹介」では、1-1、「世界有数の古代湖としての琵琶湖の価値を高める研究の推進」については、やや進んだ。1-2「研究成果を国内外に発信し、琵琶湖の魅力を人々に伝える」についても、やや進んだ。1-3「研究の質を高める環境の整備、来年中心の活性化」についても同じくやや進んだという形になっておりまして、右の棒グラフのような状況になっているという形になっております。続きまして、事業目標2というところでございますけれども、「資料を未来に残し、どこからでも使えるように整備」というところでは、2-1、「標本資料の管理体制の強化」につきましては、順調に進んでいるということで、上矢印をしております。2-2、「標本資料の整備の推進と公開による利用促進」、こちらについても順調に進んでいるということで、上矢印となっております。2-3、「ICTを利用し、誰でもどこでも使える博物館を創出」については、やや進んだという形になっておりまして、全体としましては右の棒グラフのような形でしているところでございます。事業目標3のところでございます。「みんなで学び合う博物館」でございますが、3-1「幅広いニーズに応える交流事業の充実」、3-2「出会いの場の創出」3-3「深く学ぶ力に基づく琵琶湖学習の支援につきましても、いずれともやや進んだという、で右の棒グラフの状況と同じしております。事業目標4のところでございますが、「もっと使いやすい博物館へ」というところで、4-1「誰もが楽しみ学べる博物館展示への成長」のところが、維持・停滞という形になっております。4-2「観る展示から、観る+使う展示への成長」のところはやや進んだという形で表示しております。4-3「社会の変化や研究成果を反映させた展示の成長」のところでは、順調に進んでいるという形となっております、全体では右の棒グラフのような形で評価しております。事業目標5でございますが、「より多くの人が利用する博物館」というところで、5-1、「ICTを活用した琵琶湖の魅力とその入り口としての博物館の紹介」というところが順調に進んでいる。5-2、「双方向の広報や各種調査、評価による情報収集と事業への反映」のところがやや進んだ。5-3、「来館しやすい環境の整備」については順調に進んでいるということで、全体としては右のような形で評価をしているところでございます。事業目標6のところでございますけれども、「博物の活動を安

定して継続する」というところでございますが、「老朽化した施設の改修と災害を備え」、6-2、「安定した活動基盤を確保する仕組みづくり」、いずれについてもやや進んだという形で評価をしております、右斜め上向きの矢印となっております。また詳しくはそれぞれの事業目標ご説明を申し上げますけれども、あの昨年度全体といたしましては、やや進んだ、あるいは順調に進んでいるという形で、一定大きな評価をさせていただいているところでございます。全体の評価は以上となりまして、続きまして事業目標ごとにご説明を申し上げます。

榊永研究部長：研究部の榊永です。よろしくお願いいたします。まず、事業目標1「琵琶湖の魅力を深く掘り下げ世界の紹介」に関する内容評価をご紹介します。まず、1-1ですが、「世界有数の古代湖としての琵琶湖の価値を高める研究の推進」におきましては、原著論文40件や専門家向け記述50件と、それなりの成果を公表いたしました。総合研究は、調査報告書の刊行準備を進めました。また、その成果を活かした企画展示「川を描く、川をつくる古地図で昔の地図の作業」を開催しました。さらに、現在開催中の企画展示「博物館はタイムマシン、魚類学者がみた琵琶湖」の準備を進むことができました。一方で、重点事業の2「研究成果を国内外に発信し、琵琶湖の魅力を人々に伝える」については課題も残りました。WEB等を通じた成果の発信について、体制は整ったものの、発信実績はまだ低調であり、活用しきれていないのが現状です。続きまして、重点事業1-3「研究の質を高める環境整備ならびに研究の活性化」につきましては、令和7年度に水質分析装置を調達いたしました。さらに、今年度、説明いたしますガスクロマトグラフィーの調達予算を確保するなど、大型備品になる分析機器の充実を図るという成果がございました。しかし、中規模機器などの調達には、これからの話として動いております。まとめますと、研究成果や大型備品の整備には一定の進展があったものの、次期総合研究立ち上げや中規模機器の整備については課題が残る結果となりました。

今後は、これらの残された課題に対して対応を進めてまいりたいと思います。以上となります。

大槻資料活用係長：事業目標には、「資料を未来に遺し、どこからでも使えるように整備」することを目標に進めています。全体の評価、内部評価としては、昨年度もそうですが、今年度の収蔵空間の設備更新とIPM管理体制の強化が大幅に進みました。一方、防虫に

対するリスク管理に関しては、もっと強化していかないといけないというのが現状です。

デジタル博物館のリニューアルというのは、今までの DX 仕様、デジタルマップ、電子図鑑、3D のことを指しています。それをリニューアルして、資料の公開の幅が広がりました。また、資料の利用ですが、海外の利用者、研究者からの問い合わせが増えており、目標に向かって活用の方を頑張っています。今日もドイツの人との輸出のことのやり取りをしていました。具体的に現状についてお伝えします。下の 2-1 を説明します。標本・資料の管理体制の評価、収蔵空間の保管、作業環境の改善については、収蔵庫の加湿装置や扉の不具合を直しました。また、何かあった時のための熱源監視装置や地上灯を全て交換しました。次に環境改善に対する予算申請についてです。これは毎年ここでお話ししている収蔵庫の増設についても、また予算申請をしてきたものの、なかなか通らないです。本年度もいろいろ試してはいるんですが、なかなか難しい状況です。IPM 体制の更新ですが、燻蒸ガスを新しくしました。また、光を使って菌が見えるような装置を使って、収蔵庫の清浄度という菌の数値化ができるようにしました。数値で分かるようになったので、収蔵庫の担当者も清掃を頑張ってくれるようになりました。

防虫防黴のリスク管理ですけれども、昨年度、ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、ニューハクシミが見つかりました。今のところ、一昨日に防虫調査をしたのですが、ニューハクシミは見つかっていません。ただ、昆虫が増えてきているので、今後も対応しないといけないと考えています。暑さ対策のために冷房を入れてはいますが、電気を含めて、システム上いろいろ心配しているところです。2-2 「標本・資料の整理の推進と公開の利用促進」です。これは先ほど内部評価の方で触れましたが、電子図鑑、3D、そういうものをリニューアルして、たくさんの人に見てもらえるようになりました。特に、びわ博 GIS という生き物の観察をするデジタルマップについては、昨年度は一昨年と比べて一応利用稼働率が1000%、10倍になったので評価できていると思っています。2-3 「ICT を利用し、だれでも・どこでも・いつでも使える博物館の創出」ですが、これは、展示の中に DX のデジタル博物館のコンテンツを組み込んでいくことをしています。例えば QR コードを使って表示したり、YouTube のコンテンツを表示しています。

村上会長：ありがとうございます。ただいまの説明につきましてご質問、ご意見ありましたらお願いします。

楠見委員：事業目標 1 において、資料 2 ではどれも「進んだ」と報告されているんですけ

れども、資料を読ませていただくと、例えば1－2においては文面だけを見ると「低調にとどまった」であったり、「発信に対する積極性が強くない状況となった」と課題を挙げておられます。また、資料3でその部分に当たると思われるデータ、例えば広報であったり、インターネットの発信、大変数字が伸びているのは、とても良いものを作られているから、そういう良い発信をされているからだとして十分評価できる一方で、数字だけを捉えると、作成される数や発表に関わる数字が、2024年と2025年と比べると、減っている項目もあるように見えました。「進んだ」と評価される根拠をもう少し説明いただければ、なおありがたいと思っております。よろしくお願いします。

梶永研究部長：ありがとうございます。説明のとおり、研究の論文とか報告書等は発信しているので、研究者向けにはちょっと取れているのかなと思うのですが、それをもっと噛み砕きか、各自からこのページだけ、ちょっと優しく解説するようなところに、ちょっと手が回っていなかったというところで、発信内容としては進んでいるんですけど、その噛み砕きというのが弱かったのも、このような評価としております。

中野伸一委員：どちらかというと、この資料2で書いてあるこの矢印というこの右のバーですね。これご自身でちょっと厳しく評価しすぎたんじゃないかと。楠見委員のご意見で資料3になると発見したんですけども、2025年度は色々と増えているものが多いじゃないですか。で、今、梶永研究部長がおっしゃっていましたが、ここはもう少しご自身たちで高く評価してもいいように、私自身の経験でいうと、これはちょっとあの1－1の事業3と同等ぐらいに持っていてもおかしくないように思うんですが、特に資料3を見ていろいろ述べているので、その辺でいかがでしょうか。

梶永研究部長：はい、ちょっと抑制的になったということは今おっしゃる通りあると思います。

中野伸一委員：確かに感覚的な問題があるから、こういうの難しいとは思いますが、決してインパクトが高い雑誌に載るのがいいとは思いませんけども、もう少し資料3というか、どういう雑誌にどういうのを書いているかっていうのをリストで見せていただくと、やっぱり研究の評価ってなると、そこも大事だと思うので、そこは次回以降、何か工夫をしていただけるとありがたいです。はい、以上です。

村上会長：年報の方に記載があるんですね。記載しているページなどがありましたら、ご紹介願います。

梶永研究部長：7ページに記載されています。

中野伸一委員：はい。今初めてざっと見たところですが、かなりしっかりした雑誌にたくさん発表してらっしゃるので、素晴らしいと思っています。ありがとうございます。

梶永研究部長：対応している内容が基本的に全体については、この論文のリストと同じものが、ホームページ、インターネットのページにも掲載しているというふうに7ページにあるように、この年報以外の形でも、業績の方が、こちらの方にもさらに詳しく書いておりまして、そこに本業績の方と共に博物館ホームページの方にPDFでダウンロードできるようになっています。

野瀬委員：先ほど梶永部長もおっしゃってましたけども、立派な、ちょっと専門的にすぎて。ちょっと私には分からないんですけども、研究成果が論文として発行されていて、それを噛み砕くってところからちょっとおざなりになったというようなこともありましたけど、やっぱり研究機関である一方で、やっぱり展示するっていう県民のためですね、わかりやすく表現というものを繰り返してもらってというのが、やっぱり琵琶湖博物館の大きな目標でもあるので、そういう研究成果をですね、ど素人にも分かるようにっていうのは本当に研究者にとっては難しいものですから、ぜひお願いしたいと思います。

その虫とかの話も聞いてきてましたけども、あれ、すごく面白いなっていうふうにな、スルーしてしまったんですけども、私自身は。ちょっと切り口を変えればすごく面白いっていうのがですね、もう至るところに、琵琶湖博物館ってあると思うんですよね。その研究者と、その素人の間に立つような方っていうか、コーディネーターみたいな方はおられるんですか。

亀田館長：いろいろご指摘ありがとうございます。特に、研究の内容を分かりやすく伝える専門のコーディネーターがいるわけではないんですけども、いろんな分野の学芸員がいますし、学芸員以外にもいろんな立場で一緒に働いてる職員もいますので、分野外の人に分かりやすく伝えるというのは、やはりそれぞれの専門分野の学芸員にとっても、自分たちの研究の意義とかどういう意味があるのかをもう一度自分で考え直す、そういった訓練にもなります。逆に一般の方といいますか、専門的なことを知らない方に研究の内容とか意味をお伝えするのは非常に難しいんです。ですので、やはりそこをきちんと考えて、いろんな方から質問を受けたり、わからないと言っていただくことで、逆に

そこを見つめ直すということにもつながると思います。そのあたりのところを、今後もう少し積極的にやっていければと思います。

中野伸一委員：発展させられるとか、こういうことと、その一般の方がわかりやすく説明するかは別のことだと思うんですね。で、おそらく野瀬委員のおっしゃったことは、研究者がやることと、それを噛み砕いてもっともっと広げてっていうのは、本来もっと違う専門家がやった方がいいんじゃないかというご意見かと思います。ですから、僕ら大学もそうですけども、研究を効率化することと、一般の方に広くお知らせするっていうことはもう少し違う。それで評価する方がいいかもしれないと思っています。

河崎企画・広報営業課長：ありがとうございます。実は私ども、琵琶湖博物館からプレスリリースという形で年間何十本か、60本ぐらい出させてもらっていて、研究成果について、私ども琵琶湖博物館の職員と、プレスリリースを配信いただく企業様、広告代理店さんと調整をしながら、「これはいけるな」というテーマについて、実は去年ですとビワマスの新種記載とか、あのあたりについては一般の方が食いつくんじゃないかというネタについては、関係者の皆様と調整をして、またプレスリリース配信前にチェックをしてということはさせていただいております、ヒットすると結構それは話題になって様々な媒体に載せていただいたりしています。そのあたりは今後も調整をしていきたいと考えておりますけれども、先ほど榊永さんも申し上げたように大変難しいところがありました。

あの広告代理店さんに投げて、やっぱり先方では直せないという話で返ってくるので、そのあたりは当館でしっかり対応しなくてはいけない、委託をしているだけでは難しいところがあります。

中村耕治委員：我々開発工業の企業として、いろんな報告書を、難しい報告書がたくさん、他の社員の皆さんによくお知らせするときに、教育システムのもとで、わかりやすく整理することを過去からやってきてるんですけど、最近で言いますと、この3年ぐらいで、AIを活用しており、まだ3割なら5割ぐらいなんですけど、自分の思いを少し具現化する。場面によっては、ちょっと伝わるかもしれないので、やってみてもらったらいいかと思います。

村上会長：続きまして、事業目標3および4について事務局から説明をお願いします。

楊環境学習・交流係長：事業目標3「みんなで学びあう博物館へ」になります。はしかけ

やフィールドレポーター、フェスともなどの協働機能について、今後さらに考えていければ、全体的かつ根本的な見直しや改善を行っていく必要があると考えています。

まず3-1「幅広いニーズに応える交流事業」につきましては、学校連携、地域連携、交流イベント等の事業を通じて、子どもから大人まで幅広い世代を対象にしながら、多様な団体と協働しつつ、種々の体験学習や交流事業を取り組みました。これらの取組を通じて、参加者層を広げるだけではなくて、互いの関わり合うような仕組みや地域でも活動できるような担い手の育成を重視して実施してきました。一方で、環境学習センターが相談窓口として、認知度がまだ低いというのが現状です。今後、環境学習活動のネットワークづくりや交流活動の活性化につながる広報を強化していく必要があります。一方で、多様な主体との協働をどのような仕組みとして創出することができるかということもさらに考えて実施していく必要があるように思います。3-2のところ、「出会いの場の創出」につきましては、これは主に毎年実施しているびわ博フェスを中心に考えているものです。はしかけやフィールドレポーター、地域団体や機関と連携をしながら、実施してきました。この取組を通じて、交流の場として定着してきているところだと理解しております。フェスともとの取組は、今年で2年目となりますが今後、引き続き実施していきます。昨年度は子ども若者を対象とした研究発表（9件）を実施しました。今年も引きつづき研究交流会を継続して実施していきます。また、学び合いの場の創出としましては、琵琶湖博物館と草津市との連携により、新しい企画を導入しているところです。

3-3「深く学ぶ力に基づく琵琶湖学習の支援」については、種々の体験学習や教員研修、教員向けのガイドブック等を活用して取り組みました。また、専門的な知見を活用しつつ、体験活動と教材的な学習を結びつけることで、参加者が主体的に考えてもらうというようなことを支援することを意識して実施しました。学校現場のニーズに応じつつ、少しでも質の高い学習機会を提供することにできました。一方で、課題としては、地域や学校などでどう実践できるのかを引き続き支援していく必要があると考えます。

芦谷学芸員：続きまして、事業目標の4について説明いたします。事業目標の4は「もっと使いやすい博物館へ」ということで、実施目標、琵琶湖を知る入口としての展示をより使いやすく、常に成長する展示として発展させるということを目指しております。全体的な内部評価につきましては、そこに書いてあることを概要で説明いたしますけれど

も、展示室において最新情報を踏まえた、展示更新を行い、最新情報を踏まえた企画展およびギャラリー展示、トピック展示等を実施しました。先ほど、事業目標1について研究成果を展示していないのではないか、みたいなご質問がありまして、博物館側の回答が若干ゼロ回答的な内容だったので大変気になったんですけれども、実際には展示等で最新の知見を入れて情報等の展示を行っていますし、分野によっては、何年かかけて展示としてまとめていくってような分野もありますので、全ての学芸員、研究分野で同じような形ではできないんですけれども、例えば水族でも、昨年度はビワマスの学名がちゃんとついたということで、お披露目の水族企画展示をしましたし、そのような小規模な日々の展示の中で研究成果が十分に活かされていることはご理解いただきたいと思います。また、学芸員の研究だけではなくて、職員が、そんな地域の人たちによる活動が来館者に見えるようにするために、おとなのディスカバリーにあるオープンラボで活動を行ったり、展示室でもその活動紹介を行っております。ICTの利用により、展示室でのポケット学芸員、日本語と英語の2言語のサービスを提供していますが、言語の追加等ではできませんでした。展示室におけるICTを使ったより深いコンテンツへのアクセスについては、YouTubeの「琵琶湖のちからチャンネル」の動画へアクセスするためのQRコード等展示室に設置をしました。今後はそのDX事業、資料活用のDX事業の成果なども展示室からアクセスするような形にして、目の前にない標本の情報を得ることができるように推移したいと思っております。各重点事業についてご説明いたします。

4-1「誰もが楽しみ学べる博物館展示への成長」ということですが、ポケット学芸員は先ほども申しましたように、今、令和4年度から日本語、令和5年度からの英語の2言語のコンテンツを提供しております。昨年度も中国語の追加の準備を進めていたんですけれども、実現することができませんでした。それ以外の言語についても、目処は立っているんですけれども、具体的な実現ができなかったということで、全体的な評価としては、維持・停滞というふうにしております。4-2「見る展示」から「見る」と「使う展示」への、成長ということです。こちらの方は、昨年度はインターネットの利用環境が改善されたということで、従来から電子図解やコロナ禍で増やした「おうちミュージアム」のコンテンツ以外に、YouTubeの「琵琶湖のちからチャンネル」へのアクセスができるようにいたしました。概ね順調には進んでいるんですけれども、まだQRコードの設置場所等が分かりにくいとかですね、そういった問題があるので、今後はも

っと分かりやすくしていくと同時に、DX 事業の成果へのアクセスを増やしていきたいと思います。懸念事項としては、フリーWi-Fi の契約がちょっと今年度がなくなるということで、ちょっと環境の悪化が予想されることがあるんですけども、今後は内容も充実して、そういった環境も改善していきたいと思っております。その結果、総合的な判断としては、やや進んだというふうにしております。4-3、「社会の変化や研究成果を反映させた展示の成長」についてなんですけど、全ての常設展示で展示内容を更新していますし、それは単なる更新ではなくて、例えば新しい知見を盛り込んだりとかですね、そういったことを日々積み重ねております。予算もありますので、大きく何かを変えるということは常設展示ではできてないんですけども、機器類が耐用年数超えて使っていたりとか、そういうことで、入れ替えや手法を少し新しくしたり、標本を入れ替えたりとかそういうことはしております。昨年度はさらに、文章には書いてないんですけど、水族展示室のふれあい体験の展示が再開するなどありましたし、実際には今年度になってからの再開となりましたけれど、ビワコオオナマズ水槽の再開に向けてということで、館内の学芸員はずっと展示に関わっておりました。企画展、およびギャラリー展示では、それこそ最新の研究成果を親しみやすい形で利用者に提供しているということで、そのあたりは年報の138ページぐらいが企画展となっております。146ページからギャラリー展示があります。昨年度の企画展は、「川を描く、川をつくる」ということで、人文系の学園員が中心になって何年も積み重ねた研究の成果の発表でしたし、ギャラリー展示は前半にコケ植物のギャラリー展示を行い、後半は橋本鉄男さんという民族俗学者のコレクションを紹介する展示をして、いずれも我々が研究をしながら収集してきた資料のお披露目ということになっております。団体と一緒に展示を行う取組としては、アトリウムでのトピック展示等も行っております。そういうことで、かなり順調にいろいろな展示を公表することができたということで、総合評価は順調に進んでいるというふうに思います。以上です。

村上会長：はい、ありがとうございます。ご質問ご意見等ございますでしょうか。

中野伸一委員：何度もすみません。事業目標4っていうか、あるいは事業目標5かもしれなかったんですけど、AI 関係で先ほど中村委員からありましたけど、1つあります。実は今週火曜日の朝日新聞、朝刊の一面のトップに中国最新 AI、米国に肉薄するという記事がトップに載ってました。で、これを見ていきますと、どうも中国は皆さんご存知のよ

うに、今 AI ロボットがものすごい勢いで進んでいて、実際社会実装がもうかなり進んでいると。で、かなりの作業、例えばウェイトレス、お店の商品提供なんか全部ロボットがやるようになってきているみたいですけども、この中の記事にですね、この中国の人型ロボット、AI を搭載したロボットは、すでに博物館でのガイドなどで実用化が進んでいると書いてあるんです。で、まだ製品が十分に成熟しきってないとはいえ、もう既に使ってるということらしいんです。で、これ中国であって、我が国という例ではないんですけども、今後やはり、さっきの中村委員の意見にプラスして、やはりロボットを使って、このガイドをさせるっていうのは、もう中国でやってるわけですので、日本でももう早く取り組んでいかれるのかなと思って聞いておりました。以上です。

芦谷学芸員：委員のご質問に直接答えるものではありませんが、事業目標 4 に関してということなんですけれども、配布された資料には、書いてはいないんですが、当館は、現場に、展示交流員というスタッフを配置しておりまして、館内で来館者といろいろなお話をすることによって、展示体験を深めるということを目指して、開館以来きておりまして、それとの兼ね合いが、AI を導入することで、人が介在して深い臨時交流が行われているっていう事例も、少しずつ結構浮かび上がってきているので、兼ね合いはあると思うんですけども、使えるところは使ったらいいのかなというふうにも思いますので、今後検討していきたいと思います。

中野伸一委員：僕はやっぱり人が人を、対応する方がいいと思っているんですけども、先ほど前の項目で予算枠外の要求が通らないというのがありましたよね。要するにいろんなところで削っていく中で、機械がやるべきところを機械にさせて、経費をそこで余らせて予算枠外のところということも、まあ言いたくないけどあるのかなと、そういったまだ AI の、ロボットを稼働させるのも、その、覚えこませなきゃいけないから数年かかると思うんですけども、あの、そういったことも厳しくて辛いんですけども、考えていかなきゃならん場合があるかもしれないです。それは大学でも一緒なんですよ。はい、以上です。

中野栄美子委員：フロアのスタッフの人がたくさん頑張ってはるので、人数が足りてるのか、足りてないのかわかんないんですけど、なんか親切だなと思って見てます。それは余談なんですけど、国内の人であれば、いろんなキャリアで使えるかなと思うんですけど、あの海外の方とかもいらっしゃる際に、フリーWi-Fi がないっていうのって、どう

なのかなと思ったりとかするんですけど、館内にあると重宝されると思いますがいかがですか。

河崎企画・広報営業課長：違うシステムの代替も用意はしていたんですけど、結局なんとか繋がりましたので、今年度は無事に使っていただいています。海外の方も結構両極端に分かれてきていまして、皆様、あの基本的に海外旅行の方には、あの E-SIM を入れられて、基本的にはそのご自身のギガ容量を使ってっていう方が大変増えてきて、一方でご指摘のようにフリーWi-Fiを使いたい要望がまだあるのかなということがありますので、何とか継続はできています。ただこれからどうするかにつきましては、県全体のびわ湖フリーWi-Fi というシステムがあるんですけども、そちらの方も少しずつ縮小の傾向が今来ていますので、海外の方がどういう使われ方をしているか、国内の方がどういう使われ方をしているか、その辺りのアクセスを精査しながら、どういった人が使っているかをチェックしながら検討していきたいと思います。

村上会長：他にご意見ご質問はありますでしょうか。

渡邊委員：前も言わせていただきましたが、展示解説において多言語対応が進んでいるのと同様に、日本手話言語による解説についても検討を進めていただきたく、改めてお願いします。

手話言語での展示解説は、技術的にも資金的にも難しい課題があることは認識しています。私は手話通訳に携わっている立場からお話ししていますが、実際の当事者（ろう者や難聴者）がどのようなニーズを持っておられるのか、どういった解説であれば分かりやすくアクセスしやすいのかについて、ぜひ当事者や当事者団体にヒアリングを行っていただきたいと考えております。その上で、より良い方法が見出されることを期待しておりますが、これまでの取組状況や今後の見通しについてお聞かせいただけますでしょうか。

もう1点、より利用しやすい博物館とするための「アクセスのしやすさ」についてです。障がいのある方と接する中で痛感するのは、交通手段の壁が大きいということです。どれほど魅力的な博物館であっても、行く手段がないために諦めてしまうケースがあります。行きたいと思った人が実際に足を運べるよう、アクセス面も重要な検討課題としてぜひ大きく取り上げていただきたいです。

また、私は以前、特別支援学校（養護学校）の教員をしておりました。当時、生徒を

郊外学習に連れて行きたくても予算や時間の関係で叶わないことがありました。滋賀県では、小学5年生が琵琶湖で学ぶ「フローティングスクール」のように環境が整っている事業があります。滋賀の子どもたちが希望すれば全員が琵琶湖博物館を訪れられる環境を作っていただきたいと考えております。これは博物館単独で解決できる問題ではありませんので、ぜひ教育委員会とも連携してご検討をお願いしたいと思います。

芦谷学芸員：手話言語についてお答えいたします。昨年度の委員会でご指摘をいただきまして、我々もその後いろいろ検討いたしまして、既に申し上げたかもしれませんが、ポケット学芸員っていうプラットフォームは、音声を流すだけではなくてですね、ショート動画みたいなものをアップロードすることができるような機能もありまして、そういったものを使って、例えば展示コーナーを、選んでですけども、手話言語での動画みたいなものをコーナーによっては追加するようなこともできるかなと思っております。今回の評価の対象にはなかったんですけども、手話言語は非常に大事ですし、最近カームダウンスペースみたいなものを美術館、博物館等で設置されるようになっておりまして、そういったことへの配慮は琵琶湖博物館は若干遅れているかなと思っておりますので、今後はハードの改築等が伴うものにはなかなか着手はできないんですけども、工夫をして考えていかなくてはいけないなと思っているところですので、手話言語については具体的に、検討しているところですので、また改めて相談させていただければと思います。よろしくお願いいたします。

河崎企画・広報営業課長：アクセスの件でございます。やはりその琵琶湖博物館は駅から大変距離がございまして、なかなかそのバスの増便は難しいところです。昨年実施したナイトミュージアムの際には増便させていただいて、大変多くのお客様にお乗りいただいたということがございましたので、そういったところは今後の参考にしていきたいということを考えています。今年度も12月にナイトミュージアムをバスツアーにしようかなと思っております。昨年度、大変多くのお客様にお越しいただいて、実はその烏丸半島が大渋滞になってしましまして、前の道路はですね、2つ先の信号まで、両方の北からも南からも動かない状況でした。あと、あの子どもの学校の件ですけども、実はその件につきましては、琵琶湖博物館大体年間県内の80%から85%の小学校が来てくださっています。大体160校ぐらい年間小学校来てくださっていて、そのうちの3分の1、50校強ですね60弱、の学校については、びわ湖ホールの子事業という、琵琶湖ホー

ルで声楽隊の方と一緒に歌を歌ってっていう、そういう授業がありますけれども、そちらの方と抱き合わせて実は来てくださっていて、また学校の先生、先ほど渡邊委員がおっしゃった通り、何とか一緒に行かしたいという学校の先生もたくさんいらっしゃって、最近少子化で学校が少なくなって、子どもが少なくなってきていることもあって、隣の学校と一緒にっていう、そういう形で送っていきたいという学校もたくさん来てくださいますので、そういったところについては、私どもの学校の営業専門の職員が1人おまして、その者が去年もかなりの学校を小学校回っていただいて、直接にお声をいただいてどういうことができるかについては一緒に検討させていただいているところでございます。予算の大きなところでバス代の高騰もありますので、そのあたり県の方でバス代の補助を今年度していただいているので、そういった情報も流しながら、少しでもその来やすい状況については、これからもまたこれはずっと続けていかないといけないことですので、いろいろ検討はしていきたいと考えております。

中野栄美子委員：事業目標3－1なんですけど、環境学習センターは環境学習を支えるネットワークづくり、人材の育成、環境学習の企画サポート、コーディネート、と書かれています。

私の仕事の関係で、3件の小中高、外部だと企業の福利厚生で親子で、琵琶湖の遊覧をしつつ、琵琶湖の話も聞けるっていうので、学習が入ったりとかするんですけど、そんなに多くはないんですけど、そういうのがあります。昨日か一昨日にプリンスホテルで広告代理店とか旅行代理店が集まって、こういう企画ができますっていう、マッチング会みたいなのがあったりしますが、そういうのに担当の方は行かれたりしているのでしょうか。他府県からも琵琶湖に行きたい、修学旅行ではないにしろ、1泊で研修旅行みたいなことで、どういうコンテンツがあるかというのは知りたいと思います。こういうのが提供できますっていうパターンをたくさん作っておけば、宣伝にもあるし、お金も落ちると思います。

河崎企画・広報営業課長：県の観光連盟であるびわこビジターズビューローに教育旅行部会と、国内旅行部会とインバウンド部会というのがございまして、そちらの方に加盟しており、全国の旅行会社さんと商談会がございます。そういったところで営業等させていただいているのと同時に、教育旅行については、教育旅行キャラバンということで、昨年度ですと神奈川県旅行会社を1泊2日で2日間かけて30ぐらい回るんですけど、

今年度は群馬、埼玉に行っていまして、修学旅行とか教育旅行の誘致の活動をしてい  
ますが。県内の旅行関係の企業様、例えば琵琶湖バレイさんとか、琵琶湖ホテルさんとか、  
旅行関係のところと一緒に営業をしていく中で進めているところがございますので、そ  
のあたりについてはしっかり対応はさせていただいております。

中野伸一委員：すみません、失礼いたします。今のお話でね、あの、来年10月からだと思  
うんですけど、ディステネーションキャンペーン、有効に活用してください。

楊環境学習・交流係長：昨年度、筑波大学附属中学校修学旅行で初めて滋賀県を選んでい  
ただきました。その際に、企画段階からともに考えました。環境学習の内容を含めて、  
館内だけではなく県内のいろいろな場所を実際に見学・体験されました。今後も学校連  
携事業や環境学習センターの事業として取り組んでいけたらと思います。

村上会長：県外に向けても広くアピールされている形なのでしょうか。

楊環境学習・交流係長：県内外の学校や地域など。国際的にも発信できればと、今年の世  
界湖沼の日に向けて、連携や啓発などをしていけたらと考えます。例えば、地域コミュ  
ニティセンターや協働センター、地域組織などとも連携を視野に入れ取り組んでいけた  
らと思います。

渡辺委員：中学校の視点から、ちょっとお話をさせていただきます。あの教育研修に関し  
て、えっと成果が上がっているということで、やっぱり見させていただくと、教員研修  
につきましては、特別支援学校と小学校の初任者研修、これはあの、すぐ分かるんです  
けど、全員がいかに関わることができるメンバーで、研修をやるときに、そのメンバー  
をグループ分けして、こちらの方に訪問させていただいているということだと思ってい  
ます。どうしても中学校の理科だけで、こう研修をすることがあるときには、他の教科と  
の研修の兼ね合いなどがあり、そのフィードバックがさせてもらえるのが、市内のこ  
ういう会ができてしまうと、多分センターで考えて作りはることなんだろうと思ってい  
ますけど、その部分で言うと、1年生という言い方は変ですけど、初任者がええと、博物  
館での経験を積んでおくことが非常に大きいと思っています。他府県の大学の出身者の、  
もともと滋賀県出身の方ではない、教員さんも増えておりますので、琵琶湖を知らない  
という状況で、そうしておられる方が、先ほどあったように環境教育で、琵琶湖がっ  
て言いながらも、どこに頼るのかといったら、この博物館ではなくて、WEB サイトばかり  
を使うという形になるのかなと思います。やっぱり質問をして、学芸員さん等に研究者

さんにお答えをしていただくというのを、中学校で経験するというのは、やっぱり理科の方向に向いていくというところでは、非常に大きな部分だと思います。先ほどありましたように、小学校は確かにうち聞きに行って、こちらにいるよって書いて、というループで、こちらの方を利用させていただいているというのは小学校に聞いておりますので、それで初任者派遣で、こちらの方を経験している先生たちが、やっぱり子供に会いたいという時には、話がしやすいということもあるので、それで自分がそれを経験して、こう自治体の方にまた何年か来る機会っていうのがあるんですね。中学校だけ、それがなくて、県の理科部会の方でも、あと何年かに一回ぐらいで、こちらの方で専門委員会の会合をさせていただいたりとか、私、甲賀の方にいますけども、甲賀の方でも5年に一回ぐらいはこちらの方で夏に研修会をさせていただくようなことをお願いしてさせてもらってますけども、なかなかその全員が必ず来てっていうところがないので、中学校で子どもたちに、こういうところでこうやって聞くことができるよってというアドバイスができてない人が多いのではないかとこのことを危惧しております。中学校の教員がこちらの方で経験を積む機会があればいいなと思います。その初任者研修は半強制でできるので、その機会とかもすごく大きいなと思っております。あと、いつもあの自然観測ゼミナールの方でお世話になりました。ありがとうございます。あの子供たち本当に、コロナによってあの館の方の事情もございましたけども、あの本当にあの僕たち科学部という形で、参加させてもらってるんですけども、あの、専門家のお話を聞かせてもらって、すごく喜んでいます。今、実は部活動の運動部に関しては地域移行という形で進んでおりまして、これって文化部ってどうなるんだろうということが実はありまして、科学部というものが、その移行に合わせてなくなってしまうのではないかと。地域で科学などをしてくれるんかというところとか、それから教員が減っているので、今までやったら美術部、それから音楽はちょっと違うんですけど、美術、家庭、それと科学が一緒になって、総合文化部という、ひとくくりになった部活動になっている学校が、もう半分近くになっていると思っております。ある意味、科学が主力でやっていた地域の学校については、こういう参加するときに体験することで、いい方向に進む場合もあるんですけど、逆に科学が、そんなに強くなかったところになると、美術系に動いていって、もう何もしないままにっていうことになってしまったりしています。良い面も悪い面があるんですけども、このゼミナールにつきましては、あのまた中学校の方では続けていきたいと

思っておりますので、またお願いしたいなと思います。以上です。

楊環境学習・交流係長：ありがとうございます。コメントとして受け止めさせていただきたいと思います。また、そのような中学校、理科部、部活のようなグループ、学校関係のグループ、そういったニーズに合わせた形で、交流事業として取り組んでいけたらと思います。現状としましては、中学校による来館利用は減っていることもあり、課題として認識しており、今後も考えていく必要があると思います。

村上会長：教職員研修がどういう内容で、どういう場所が、どのくらい参加しておられたのかなっていうのね、年報で確認しようと思ってたんですけども、編集のところにもあるようですが、どこを見たらいいのでしょうか。もしくは、何人ぐらい参加されていますでしょうか。55ページ、56ページ、でしょうか。

楊係長：初任者研修につきましては、56ページの1番上と前のページにも研修内容について掲載しております。

村上会長：フローティングスクールに関わるということで、5年生の先生方を対象にされているのでしょうか。どういう先生方が参加されているのでしょうか。また、特別支援学校の先生方も対象にされていますが、その後来館された等フィードバックはいかがでしょうか。

楊係長：フィードバックと合わせて、後ほど提出させていただきます。

村上会長：それでは続きまして、事業目標5、6につきまして事務局から説明願います。

河崎企画・広報営業課長：資料の方をご覧いただけたらと思います。「より多くの人が利用する博物館へ」というところでまとめております。実施目標といたしましては、「ICTを活用し、「世界」を見据えた広報を展開して、より多くの人の利用を実現します、また、双方向の広報によって、常に博物館の社会的評価を情報収集し、博物館の魅力向上に役立てます。」ということです。全体の内部評価といたしましては、先ほどご説明をさせていただいたとおり、デジタルミュージアムにかかるコンテンツ各種の追加を行いましたので、博物館から発信する各種情報の充実を順調に進めることができたという評価をしております。また、次年度、新たな取組をしっかりと進めるということで、SNSも活用しながら利用促進を図っていきたいと考えているところでございます。また、常設展示室、企画展示との連携を一層強化し、展示室とオンラインの情報から利用を促進化していくということと、またそれ以外ですけれども、YouTubeチャンネルの動画掲載と効

果的な訴求を行いましたので、年度当初から約3倍のチャンネル登録者数となりました。公立の博物館では、全国で2番目に多い登録者数となりまして、1番目は科博さんの6万5,600件でございます。2番目に多い登録者数となりました。先ほどアクセスの話がありましたけれども、新たに湖上交通の定期運行が始まりまして、湖上交通利用者の方々については、団体料金の適用を新たにさせていただくこととして、当館の方でも来館者へぜひ湖上交通を利用してくださいという周知を行わせていただいたほか、先ほどご説明しました教育旅行、団体旅行の際に、ぜひこの湖上交通の活用をお願いしますということで、旅行会社等への営業について進めることができたという評価をしております。各項目につきましてご説明を申し上げます。

5-1、「ICTを利用した琵琶湖の魅力とその入り口としての博物館の紹介」でございますけれども、先ほどご説明させていただいたとおり、当館のホームページの方に、電子図鑑、3D図鑑、びわはくGISのコンテンツを順調に追加できたということ、また当館のYouTubeチャンネルですけれども、琵琶湖のちからチャンネルの方で動画を18本、昨年度は公開し、博物館への関心が高い層、YouTubeの動画を載せた際に、広告周知をするときに、博物館関係のチャンネルを見てらっしゃる方々に訴求を行ったことで、登録数が約9,000人、当初9,100人ぐらいでしたけれども、目標1を1万5,000人としていたところなんです、最終的には3万4,100人まで、目標の倍以上と大幅に回ることができたということ、またナイトミュージアムの際、Xの方でちょっと発信をしたところ、120万回の再生ということで、大変な再生数になりまして、このおかげさまで、2時間半に3,801名のお客様がお越しいただいたということになっています。また、ツアーのほぼ40名、全て完売をすることができたという形になっています。5-2のところでございますが、「双方向の広報や各種調査・評価による情報収集と事業への反映」のところでは、毎年当館の方で実施してるアンケートでございますけれども、アンケートの項目については統計の専門家の方への相談を行わせていただいた他、当館の博物館学領域の方でも検討を進めまして、実施をさせていただきました。特に経年分析のあたりはどういったことが項目として重要なのか、適正化、質問を見直すことについて検討させていただきました。また、昨年度ですけれども、今年度30周年を迎えることから、びわ博フェスの際に、トピック展示という形で参加型のものを設けまして、私とびわ博ヒストリー、思い出とメッセージでつながみんなでつくる展示というコーナーを設けました。こちらの方に、

これまでの30年間、またこれからの当館との関わりを好きにポストイットに貼っていただいて、意見を収集する取り組みをしまして、多くの皆様から、30年前の懐かしい思い出から、これからこんなことがしたいという未来の取組まで意見をいただいたところでございます。

5-3、「来館しやすい環境整備」のところでは、令和7年4月12日から12月14日まで、堅田にあります壱兵衛造船所様が新たな定期交通の航路として烏丸半島港、おごと温泉港、におの浜観光桟橋をつなぐ航路の定期運行をいただきまして、先ほど申し上げた団体料金の適用をさせていただきました。このクルーズ船ですけれども、におの浜と烏丸半島港は69日間運行して1,379人の方、おごと温泉港と烏丸半島港は66日運行して1,012人という形で一定の利用がございまして、団体料金の方も217人の方が適用されました。

駐車場の方から指道標という形で、クルーズ船の安全を設置することで、来館者の周知を図るなど、実施したところでございます。先ほど少しご説明しましたとおり、ナイトクルーズの際には路線バスの臨時便の増員、プレミアムナイトツアーという40名限定のツアーの方ですけれども、こちらの方はナイトクルーズというのを実際にさせていただきましてございます。事業目標5については以上となります。

山本総務課長：それでは、事業目標6の「博物館の活動を安定して継続する」についてご説明させていただきます。事業目標としましては、大きく2つございまして、当館は30周年を迎えまして、当然施設の方も30周年を迎えております。いろんなところが30年も経ちますと、かなり老朽化しております。それについてどういうふうに対応していくのかということと、あともう1つが県の施設ではございますが、いろんな活動基盤を安定するために、企業様からでありますとか、そういう支援を受けておりますので、その支援についての仕組づくりについて説明させていただきたいと思います。全体的な評価でございしますが、内部評価といたしまして、当館も滋賀県の全体的な県庁、全庁的な組織の1つですので、県全体として、いわゆるファシリティマネジメント達成施設を長期的に維持していくという、その1つに、既に続けられております。そのため、大きな部分については、全庁的に県全体として計画的に更新の方をしているところでございますが、当館の施設とか機械とか個別的なものにつきましては、博物館独自の計画、修繕計画に基づきまして、各年度修繕を行ってきているところでございます。

施設や機械設備の健全度の判定については、今いる職員は基本事務の職員、あとは学芸員の方ということで、いわゆる専門的な知識があまり乏しい状況でございますので、いわゆる専門的な外部業者の診断等を踏まえて、当館の将来を据えた長期的な更新計画を進める時期を迎えているというふうに考えまして、今計画をしております第三次中期基本計画の見直しを昨年度実施しまして、この事業目標6につきましては、継続可能な博物館づくりと修正をいたしまして、長期ビジョンの策定、将来博物館を50年先どういうふうにしていくのかという長期分野の策定でありますとか、施設整備の大きな修繕、いわゆる緊急修繕、なんとかもたすような修繕ではなくて、全体的にどういうふうに変えていくのかという修繕改修でありますとか、先ほど説明いたしました、財源、より自由となる博物館運営をするための財源確保をどういうふうにしていくかという検討を進める方向で、昨年度は検討したところでございます。具体的に個別の目標と実施状況について説明をさせていただきます。6-1といたしまして、まず施設でございますが、大きな方向性については、先ほど述べたとおりしたところでありますけれども、個々個別に直近で必要となる施設修繕がございます。その中の1つといたしまして、防火設備の更新でございますとか、防犯カメラの更新、あと高圧電力受電設備の改修等を昨年度は実施いたしました。また、先ほど来説明しておりますとおり、館全体がどういうふうに今、設備が傷んでいるのか、それをどういうふうに直していくのかということにつきまして、中間見直しをいたしまして、ここに書いています、施設の老朽度と健全を図る調査の予算を昨年度確保いたしまして、今年度、その調査の実施を進めているところでございます。また、このほか、今年度、緊急というか、定期的に行う修繕改修がございますので、その1つとしてエレベーター、エスカレーターの改修に係る予算を確保し、今年度、随時実施をしているところでございます。また、あの滋賀県、幸いなことに、今のところ大きな災害、いわゆる地震とかございませんが、いずれ来るであろう大きな地震の災害に対応していくことは、事前の準備として必要でございます。そのためにも緊急管理マニュアルの統合案ということで、修正を昨年度実施いたしました。

また、防災訓練、火災訓練について2回実施をしたところでございます。また、ここに書いてありますように、最近はあまり言われておりませんが、いわゆるあの緊急アラート、どっかの国から飛んできたミサイルの対応とか、そういうことに対応するための指定設備として、県の方から依頼を受けまして、それに同意しましたことから、

それに対する一時避難所としての役割を踏まえた施設整備を進めていく必要があると考えております。もう1つ、6-2でございます。企業の皆様、また個人の皆様からいただくこと等の踏まえた安定さ、活動基盤を確保する仕組づくりでございます。これまでの企業様からの寄附を踏まえまして、展示事業に限定した寄附を受けるということで、企画展示や子ども若者向けの新規事業である「いきものふれあい体験ワークショップ」事業、また、絵本創設プロジェクト事業など、今までのいわゆる金銭的な寄附とは別に、独自の新たな取組を実施することができました。また、先ほど来説明しております基本計画の中間見直しにおきまして、入場料、入館料の見直しでありますとか、博物館が有する人的・物的資産や価値を活かした新たな歳入確保の方法を検討することや、研究費や研究備品の財源の確保に向けまして、独自の基金を設けるなど、安定的な緊急箇所に資する仕組づくりを検討していきたいと考えております。具体的に、昨年度寄附いただいた例をご提示させていただいております。水族企画展示におきましては、淡水魚から見る世界の湖沼における物件寄附といたしまして、木下カンセイ様から水槽内の水温調整用クーラーの物品の寄附をいただいたところでございます。また、子ども若者学習支援の事業の助成といたしまして、平和党財団様から、生き物ふれあい体験・ワークショップ事業ですとか、絵本の作成プロジェクト事業に対しまして、ご寄附をいただいたところでございます。私から説明は以上でございます。

村上会長：はい、ありがとうございます。ただいまの説明についてご質問をお願いします。

荒井委員：よろしくお願いいたします。この滋賀県立琵琶湖博物館の公式ホームページが非常にわかりやすく整理されていて、特にこの「びわこのちからチャンネル」ですね。

「びわこのちからチャンネル」これを今までは、その時その時にこう出てきた、検索されたものが出てきたと思うんですけれども、今ほとんどのものが見ることができるような状態になります。そのアクセス数も34,000人に増えているということで、本当にびっくりしている状況なんですけれども、その前に書かれている博物館への関心が高い層ということで、先ほどもお話が出ていたと思うんですが、これはどんな層なのかということがちょっと知ってみたいなのというのがありまして、ぜひお聞かせいただければと思っております。

河崎課長：ありがとうございます。YouTubeとかですね、Googleで検索をするときに、博物館とか、水族館とか、そういうことを検索された方について、Googleの方で情報収集

をされていまして、そういったことを検索されたことがある方について、こういう動画ができましたよという広告配信を行っています。ですので、実は再生回数、博物館の動画の再生回数ですけれども、今まで1番多かったのは、あの、ここにいる芳賀さんの「藻狩り」っていう琵琶湖の藻狩りも紹介した動画で、11万回再生ぐらいあったんですけれども、ただそのたくさんの方に一齐に広告配信をしますと、再生回数は一定伸びるんですけど、チャンネルの登録には至らなかったということがございます。で、今回はその好きそうな方々に、そういうことを調べたことがある人に広告を配信したので、ご覧になっていただいて、登録をいただき、ファンになっていただいたという形になっています。それを昨年度はさせていただいて、こういう形にございました。

荒井委員：ありがとうございます。それとですね、本当に琵琶湖博物館のことがとてもよくわかるホームページになったと思うんですけれども、2025年は1,000件を超える問い合わせがあったと事業目標3のところに書かれていたんですけれども本当にその対応が大変ではなかったかと思っております。それをやはり内容を意識して作成されたのがひょっとして「関連する質問」というコーナーが設けられていまして例えば何時間で琵琶湖博物館まわれますか、とか、琵琶湖博物館で何が有名ですか、という項目と答えがすごく楽しく書かれていますのでよく分かります。やっぱりそういう方も踏まえて、今回このホームページに関連する質問っていうので琵琶湖博物館だけではなくて、琵琶湖、滋賀県のことを語っていましたが、そういうこともやっぱり踏まえて作っていただけたのでしょうか。

河崎課長：あの、ウェブサイトの方ですけれども、リニューアルして8年目になりますけれども、その際に、そのあたりはあの考慮して出させていただきまして、ただ8年経ちましたので、あの、お褒めいただいたことに加え、例えばパソコンで見やすいホームページになっているので、スマートフォンで見やすくするとともに、どんどん技術が変わっていくので、あの、こうした8年前考えたこと、今考えなきゃいけないことについても十分検討しながら、やっぱりそこは日進月歩のところがありますので、あの、随時対応はしていきたいと考えています。

廣瀬委員：この広報PR活動を非常にうまくやって、このチャンネル登録数が増えたことを非常に評価すべきだと思うんですけど、ここからだと思うんです。そんだけ見ていただいたことが、すごく琵琶湖博物館が求めているとか、それを見て、そういう方が来る

ってということにならないと、本当に広報ってというのは意味がないと思いますので、先ほどこから議論されている教育プログラムを、考えてる人がチャンネル登録をされていて、それを見たことで連れていきたいとか、ここに本当にリアルにここに足を運ばせることにつながらないと広報発信ってというのは今、本当に Instagram とか YouTuber とかで数だけを競うことがあるんですけれども、どんな方が見て、そこから次どのアクションを起こしてくれるかっていうところをしかけていかないと、数だけを追ってしまうと、例えば、前段階の事業目標でもあったんですけど、質の良いワークショップを作っていたとしても、そこちょっとマッチングしてないところもあるのかなと思います。なので、私はこの博物館、ここの琵琶湖博物館ならではの体験ワークショップ、まだまだこれから可能性があると思うので、その YouTube でチャンネル登録をしている方が見て、その体験を是非行ってみたいっていう方に持っていければ、すごく有効活用できるなと思います。で、事業目標の6で安定した活動機能を確保する仕組みづくりにもつながるんですけれども、その企業とか補助金とか行政の予算だけに頼るのではなくて、本当に価値のある体験ワークショップであれば、価格を高くしても、その体験活動の内容に見合った、その商品づくりというか、それだけのお金を出しても体験できる、ここだったらっていうのを作っていくことも1つ、安定した基盤の支えの1つになるかなと思います。私たちの子供のワークショップとかを乳幼児の対象が多いんですけれども、その赤ちゃんと一緒に家族ができる体験の金額で言うと、ここ本当に10年間で高くしても全然それが昔は子育て支援ってというのは無料で受けれるものみたいだと思うんですけど、やっぱりそこは特別な今しかできない体験ということで、その金額ってというのは本当に民間とかよって考えるところを一旦フラットにして、ニーズも探してみながら、本当にこのたくさんのチャンネル登録数がいらっしゃるっていうことはすごいファンができてきていると思うので、よりその方がここに来て特別な体験をしているっていうのが発信されるのも1つの成功になると思います。

河崎企画・広報営業課長：ありがとうございます。やはり琵琶博物館の理念としましては、あの琵琶博物館を知ることでフィールドへ行っていただきたい、実際に県内各地に行っていただきたい、関心を持っていただきたいということが目的でございます。そのために実はその YouTube のチャンネルは、まあ世の中の逆張りっていう形、逆の動きをしています。今、世の中の動画は、ショート動画がとて多くなってますけど、私ども博

博物館の YouTube チャンネルの動画は10分以上必ずっていう形で、なぜそういう逆張りをしているかと言いますと、やはり関心を持って次に進んでいただきたいということがあって、いろんな広告代理店さんからはショートがいいですよ、っていう提案をいただきますが結構断ってます。博物館の理念と合わないのということで、そこはおっしゃっていただいた通り、しっかりと理解をいただいて、参加をいただいて、県内各地に様々な関心を持っていただきたいというところで進めているところですので、その対応をしっかりしていきたいなということは考えているところでございます。あと、安定した基盤のところでございますが、もうおっしゃるとおりで、実はその博物館の入館料についても、事業目標の6のところに入れてはいるんですけども、その博物館入館料について、県全体の条例の中で縛りがございまして、上げることができないっていう、非常に厳しい環境下にあります。その中で、じゃあ、どうやっておっしゃっていただいたように、もっとお金払ってもいいよっていう方が世の中たくさんいらっしゃるって、そういった方々をどうするかで、昨年度、年度末、3月にさせていただいたナイトミュージアムも入館料840円で、夜の体験をさせていただいたので、皆さんからもっともらえますよという声はいただくんですけど、条例の縛りがあって難しいところがあります。だからそのそういう中で何ができるかというところで、先ほどナイトミュージアムツアーがありましたが、実はツアー代金の中に展示交流員さんとか警備とか人件費をオンさせていただいて、別契約して旅行会社から支払う形でさせていただくようにしていたりとか、来館いただいた方々にも、見合った料金を払いたいというお客様がたくさんいらっしゃいますので、今後しっかりと検討していきたいと思っていますし、あと、こういった企業様からの支援金だけでなく、やっぱり様々なところで、新しい収入についてもお声をいただいていますので、そういった収入の確保をしながら、持続可能な博物館とか新しい収入源のところ、こういう確保しながら、より博物館に回せるような、そういう取組については、私どもも一生懸命考えていきたいと思っておりますので、ぜひともまたご意見いただきたいと思っております。

中村耕治委員：前半通じまして、去年も申し上げたんですけど、本当に関心深く聞かせていただいていますし、非常に何ですかね、取組も多様化されていまして、本当に真剣に皆さん取り組まれているし、その成果が出ているというふうに思います。そういう中で、そういうのを大前提のお話として少しお聞かせ願いたいんですけど、例えば、私の感性

ですと、琵琶湖があったからこそ、古代から歴史が、人が安土城に着いたとかですね、あと、例えば安土城とかもこう山のほとりにありますけど、戦国時代の歴史とやっぱ結びついてない全国の方もたくさんいると思うんですけど、例えば歴史とのコラボレーションによる見せ方であったり、あと私が専門の環境で言いますと、やっぱりたくさん環境事業もされてるんですけど、いわゆる環境の本来本元って、生物多様性もさることながら、カーボンニュートラルというところが、世間ではよく言われてるんですけど、そのあたりは、どのようなプライオリティを持って検討されているのでしょうか。よろしくをお願いします。

河崎企画・広報営業課長：ありがとうございます。えっと、歴史とのコラボレーションでございますけれども、実は当館の博物館の学芸員に歴史の担当がおりまして、今度豊臣秀吉の朱印状のレプリカを展示するコーナーを設けます。今ちょうど「豊臣兄弟」が放送されてますので、新しい4月から来た学芸員なんですけど、早速その知見を使って、戦国の、今、県全体でも戦国のキャンペーンや観光キャンペーンがありますので、そういった方にささるようということもありまして、連携をさせていただいて進めているところでございます。生物多様性のところでございますけれども、ダイハツ工業様はじめたくさんの企業様からご寄附をいただいているところで、そういったところが工場の敷地内でのビオトープとかですね、生息域内保全とか、そういった活動をしてくださっている企業様が増えてきていまして、かなり一緒に博物館の知見をお借りしたいというお声をいただいています。そういうのは非常にありがたいことですので、そういった取組については、企業様と一緒に学芸員の方が出てきまして、一緒に研究させていただいたりとか、そういう活動をしています。また、例えばそのカーボンニュートラルですと、うみっこ広場という屋根がついた広場がありますけども、あちらの方にプロブスカイトの太陽光パネルを8月から工事が入って設置をさせていただくということもしますし、あと今あの県内のプラスチックの専門会社さんの方からペットボトルのキャップを使ったリサイクルベンチ、それを博物館の職員の方でキャップを集めていまして、今年度中にそのリサイクルのベンチをぜひ寄贈したいというお声をいただいていますので、それは2階の屋上広場の通路のところに新しいベンチを今年度置きたいと考えています。こうした来館者の方々にこういう取組をしていきたいと思います、そういう形では一緒にさせていただきたいと考えています。多くの方からのご連携のお申し出をいただいています。

すので、そのあたりで引き続き取組を進めさせていただいているところでございます。

中村耕治委員：ありがとうございます。もうそこまでやっていらっしゃるのでしたら、例えば滋賀県県下の学校さんは、もう椅子事業でここに来るとか、そういう県議会の仕掛けとかですね、そういう今の活動を見て、すごくあの誇りに思います。そういうとこまで将来を見据えてできればいいなと思います。

中野栄美子委員：この半島でけども、琵琶湖博物館があって、学芸員がいて交流員がいて、いろいろされていると思うんですけど、環境省の自然共生サイトへの申請はされているのでしょうか。

亀田館長：烏丸半島は、元々非常に多様な生物が生息し、自然が豊かな場所であったところに、博物館が出来上がったという経緯もありますので、周辺で観察会も行ったりしています。真ん中の空き地になってる場所がサーフィン施設が来ることになっていますけれども、そこにカヤネズミが生息しています。施設が来るということは、もう決まっていますので、仕方がないところではありますけれども、当館に専門の学芸員がおりますので、希少種であるカヤネズミの保全について、例えば、別の場所に移動するとか、そういったことを草津市や業者の方と相談したりしています。烏丸半島は、遺跡もある場所でもありますので、自然共生サイトには申請しておりませんが、いろいろな意味で、博物館が設置されているこの足元の場所については、おっしゃる通り、もう少しアピールしたり、活動したりということも必要かと思います。

村上会長：それでは、今回の内部評価の意見交換を受けまして、この後の外部評価のまとめ方について質問したいと思います。資料としては、資料の4部の方にありますね。外部評価記入票というのがございます。事業目標の1から6にそって、それぞれ評価をご記入いただく形になります。方向性、進め方などについて、評価と助言をとということで、3つの重点事業ごとに記入いただきまして、昨年度と同様に皆様からのご意見を集約して、私と布谷副会長でご相談しながら、総評を作成してまいりたいと考えておりますが、こうした進め方でよろしいでしょうか。いかがでしょうか。よろしいでしょうか。はい、それではちょっと例年よりも短いペースになるかもしれませんが、8月7日金曜日になります。やや短くなりますが、ちょっとお盆休みの間に総評をとと思いまして、例年より時間になりますが、8月7日までに皆さんに記入票を送付いただき、また、私からの回答で集約して、その表を作成するという流れで、外部評価させてまいりたいと思いま

す。もう本日の意見交換の思いが温かいうちにそれぞれからお願いしたいと思います。  
まだまだご意見であろうかと思いますが、この議題については以上で終了としまして、  
続きまして議題2の方、その他の方に移りたいと思います。今年で30周年を迎える琵琶  
湖博物館ですが、30周年記念した事業について事務局から説明をお願いいたします。

河崎企画・広報営業課長：よろしくお願いいたします。資料5-1、5-2の方をご覧ください  
ただければと思います。5-1の表のところでございます。こちらの方は前回の協議会  
でご説明申し上げるところでございますので、裏面の方をご覧くださいけたらと思います。  
5-1の裏面と5-2の方で確認いただけたらと思います。これまでの事業というところ  
で、5-1の裏面のところでございますが、下の方にギャラリー展がございまして、  
ナイトミュージアム3月8日の分とナイトミュージアムのツアーの報告させていただい  
ていて4月11日新ビワコオオナマズ水槽と新コアユ水槽をオープンさせていただいたと  
いう形となっています。続いて開催中の事業でございますけれども、上の段2つでござ  
いますが、今第34回企画展示というところで博物館魚類学者が見た琵琶湖ということで  
展示をさせていただいております。同時開催で、水族企画展示、シーボルト江戸参府と  
日本の淡水魚という形で展示をさせていただいております。この7月18日から行ってい  
ます企画展示の方では、オランダのナチュラリスさんの方から、トキやシーボルトが持  
ち帰られた魚類の標本、あるいは、スウェーデンやアメリカの方など海外、国内外から  
多数の標本を管理して展示をさせていただいております。今、多くの来館者の方に来  
ていただけてます。来館者はおそらく過去最高の初速を計測している状況でございます。  
本当にありがたいお話になっています。また連動して、そのシーボルトと江戸参府、日  
本の淡水魚の展示の方をさせていただきます。続きまして、今後の行事予定ですけども、  
10月24日の方に30周年記念式典を開催させていただく予定でございます。これまでの歩  
み、これからも含めてということで感謝をお伝えしたいということ、また30周年記念誌、  
それから文集もここに合わせて作成をする予定で、今準備を進めているところでござい  
ます。

続いて、びわ博フェスについては拡大版ということで、今年度大きく展開をしていき  
たいと考えています。従来よりさらにパワーアップという形で考えていきまして、昨年  
度、大変好評であったことに加えまして、京都市、滋賀県の観光政策局の連携事業とい  
うことで、子どもを大津港から運べないかということ、また草津市さん、先ほど楊係長

から申し上げた草津市スイーツマルシェというのをあわせて開催させていただく予定です。びわ博フェスはなかなか食べる場所がないということで、こちらからご提案を申し上げたところ、ぜひ一緒にやりたいということで、ショッピングセンターの方でされているスイーツマルシェを、ちょうどロータリーのところで10店舗ほど来ていただいて、スイーツを食べていただけるような、そういう機会を設ける形で準備を進めているところになります。また、先ほど中野委員からいただきました DC キャンペーンの連動のミュージアムツアーを2種類用意してまして、1つは学芸品解説付き特別ツアーということで、水中ドローンを活用した湖底ツアー、こちらの方が10月22日に開催予定で今発売開始されたところでございます。また、11月にはプランクトンの観察ツアー、こちら船に乗ってという形で、そういったものの準備を重ねています。ナイトミュージアムの方ですけれども、12月18日、19日、23日の3日間バスツアー、あるいは宿泊のプランの方ですね。こちらの方、2本で今準備を進めているところでございます。また、ギャラリー展第2弾のところで、地域の方々から、あるいは研究者から評された資料等を含めてですね、「発見をめぐる資料の物語展」を1月初めからこれはできないかというところで準備を進めているところですので、あの企画展示室、企画展示終わった後すぐにこのギャラリー展第2弾に模様替えが入ってくるというかなり忙しくなっていく形となっています。また30周年の記念セミナーということで、「琵琶湖の森と人間と」でございすけれども、あの琵琶湖博物館、琵琶湖だけではなくて、森林、様々な地域のことも全て取り扱っていますので、そういったことを含めて、また来年度の企画展示が森の関係で今進めていますので、そういったところでイベントということで実施をしていきたい。また、水鳥水槽のリニューアルについても3月になんとか間に合える形で進めているところでございます。ちょっとあの見え方を変える形で、より現実に近いような、そういう面白い展示になるという形で今、準備を進めておりますし、最後、琵琶湖博物館の研究調査報告を発行するという形で準備をしているところでございます。予定としては、これからとなっております。

村上会長：ありがとうございます。ただいまの事務局の説明、また全体につきまして何かございますでしょうか。

それでは、本日の会議は以上で終了いたします。議事進行にご協力いただきありがとうございました。事務局に進行をお返しいたします。

廣部副館長：長時間にわたりご議論いただきまして、ありがとうございました。本日いただきましたご意見は、私どもで検討いたしまして、今後の博物館の運営に活かしていただきたいというふうに考えております。なお、今回の議事録につきましては、約3週間をもとに、委員の皆様へ送付させていただきます。

最後に館長より一言ご挨拶させていただきます。

亀田館長：皆様、本日は活発なご議論をいただきまして、本当にどうもありがとうございました。今、会長から発言がありましたように本協議会の任期が8月末までとなっておりますので、この15期の皆様につきましては本日が最後の協議会となります。本日ご出席の方の中では布谷委員、それからご欠席ではありますが公募委員のお2人、上久保委員と森委員が今回で任期が満了し、ご退任という形になります。今日オンラインでのご参加となっておりますけれども布谷委員には、個別に貴重なご意見をいただくとともに、副会長として、村上会長とともに、外部評価の総評を取りまとめていただきました。専門の博物館学の視点から、また博物館の実務経験から、博物館を長期的に見た今後のあり方について、大変貴重なご意見をたくさんいただいておりますので、博物館の今後の検討に活かしていきたいと考えているところです。協議会の委員としては今期で最後となりますけれども、お立場に限らず、またご意見ありましたら、ぜひいただければと思っております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。以上、私からの閉会の言葉とさせていただきます。

廣部副館長：それでは、令和8年度第1回琵琶湖博物館協議会を開会したいと思います。本日はありがとうございました。